

次の文章を読み、設問に答えなさい。

「車を使うのは途中までだ。あとは山歩きになる。無理しなくてもいい」とおじさんは言った。
「してない」

「だったら靴だけでもかえろ。そんなビニールみたいにやわなのじゃあ、ぬれた道がこわい」
「でも、これしかないよ」

5 「田舎へ連れてくるつてのに、あいつはそんなものしか持たせなかったのか」

おじさんは母さんの名前を言いながらちつと舌打ちして、まあ、ずっと町に住んでりや肝心なことを忘れちまうもんだ、とあちこちに傷がついて革のはげかけたごつい編みあげ靴をはきながらひとりごとみたいに言う。こんなに底のaアツい靴を少年は見たことがなかった。靴底の素材だってゴムにしては固いし、プラスチックにしてはやわらかくて弾力がありすぎる。さつき下の棚のすみにあるのを出してくれとたのまれていいかげんに片手で持ちあげたとき、予想外の重みに少年の手首はぐにやりとひねられそうになった。靴にはじんわりとしめり気があって、足首をすっぽりとくるむ革の筒から空気がぬける気配などまるでない。手の先でとつぜん重さを増した靴に、腰を下ろしていた両足首のバランスがくずれて、少年の身体がぐらりとよろめく。それを見て、(一)おじさんは煙草の煙といっしょに、ふぬつ、と変な音をもらした。

10 めったに会わないひとだから、こういう小さな失敗のたびに少年はひどく緊張してしまう。前回この家に来たのは小学校二年になったばかりのころで、父親が家を出ていった直後のことだった。毎年の年賀状におばさんとふたりでならんでいる写真が刷られているから顔になじみはあるけれど、ふだん会っていないとしやべり方のくせがうまくつかめなくて応対に苦労する。間近でながめると写真ではわからないところがいやでも目につく。深く黒いしわが数本、両方の目のわきにbキザまれ、その位置といい角度といい、母さんとうりふたつなことになぜか胸をつかれる。

15 「二段目のおくに、もっと小さいのがある。そいつをはいていけ」

おじさんはどさりと腰を下ろし、左の靴をすませ、右のほうのひもをむすびながら彼に命じた。下を向いたままなので、くわえた煙草のこい煙が顔をほうのように伝い、もみあげにcソつてうえにのぼっていく。(二)少年の言葉がのどもとにひつかかつて、あ、とも、い、とも応えられずたいがらつばい音だけが舌のおくで転がるのは、その慣れない煙のせいなのか、まだ残っている緊張感のせいなのかはつきりしなかった。

20 言われたとおり、二段目のおくのほうに靴らしきかたまりの入っている白いレジ袋が見えたのでそれを取り出してみると、Aおじさんの靴とおなじ型の、サイズだけ極端にちがう革靴が入っていた。いたみはあるけれど、また革の色つやもいい。大

25 切にされているのがひと目でわかった。

「これ？」

「そうだ。ちようどおまえの足くらいだろう。はいてみる」

30 足を入れてみると、やけに小さい。新聞紙がつめてある、とおじさんがそっけなく言う。どうりで足の先がつまって入らないわけだ。手をつつこんで新聞紙を引っ張り出すと、くしゃくしゃとまるまっではいなくて、ほそながい棒状にずると抜けてくる。先のほうはほんのわずかがしめつていて、甲の部分にあてる革をぐいと引っ張るようにして足を入れなおすと指の先がちよつとだけあまる。ゆつくりひもをむすんでみると、左右ともアキレス腱のところにすき間ができてさすがにあつらえたようにはいかなかったけれど、がっしりしてたのもしい感触だ。少年がひと差し指を入れてすき間の大きさをたしかめているのに気づいておじさんはようやく煙草を手に移し、台所からちよこちよこ出てきたおばさんの手から弁当を入れたリュックと水筒を受け取りながら、子どもサイズの靴をあごで示した。B視線を移したおばさんのまゆが、「瞬」びくりと動く。両の目が大きく開いて、表情がくずれかけたそのぎりぎりのところで平静をとりもどし、これをはかせていくの？ とたずねた。

35 「しかたないだろ。ほかにはけるようなものがない。町へ買いに出てたら、帰りがおそくなる。こんなズックじゃ簡単にぬげちまうからな。けがさせるわけにはいかん」

おばさんはだまって、少年を見た。

「きつくない？」

40 「うん。でも、ちよつとゆるい。うしろが」

「見せてごらん」

おばさんは玄関まで下りて彼の横にしゃがみ、指でつま先をおして空間がないかどうかを確かめて、このくらいならだいじょうぶかねと言いながら、今度はかかとのほうに指を差しこんだ。

45 「あら、ほんと。きつすぎてもしけないけどねえ。ゆるくつても、靴ずれになることがあるし。なにかあてがってやればいいかな。手ぬぐいの古いのを切ってきてあげる。待っててね」

おばさんがもどってきて、短冊みたいな布きれを手わたしてくれた。ひもをゆるめてその布を二枚重ねに入れてみると、サポーターでもしたみたい足首を軽くしめつける感覚があつて、靴と足がぴたりと吸いついた。手で持つと重いのに、実際に立って歩いてみたらふしぎと軽い。(三)どうやら思わず知らず笑みをうかべていたらしい。(四)それまでめんどろくさげに煙ばかりはきだしていたおじさんの表情が、心なしかやわらいだような気がした。やつぱり母さんに似てる、と少年は思う。笑みをうかべると左のほおだけに力が入って、くちびるのはしがくいつとつりあがる。

「ちゃんとふたりぶん入ってるだろうな」

「食べきれないくらいおにぎりが入ってますよ」

「ツナはある？」少年がおずおずとたずねた。母親が仕事帰りに買ってきてくれる、マヨネーズで和えたツナのおにぎりが大好物だったのだ。

55 「ツナはないよお、ごめんね。うちはいつも梅干しと昆布、それから鮭。おかずにあまい卵焼き。ついでにとりの唐揚げも」

「坊主」おじさんが煙草をくわえたまま言う。小僧とか坊主とか、そんな呼び方はテレビの時代劇でしか知らなかったのではじめはびっくりしたが、坊主がお坊さんのことではなくて自分を指していることくらいはわかる。

「にぎり飯にツナだのマヨネーズだのを入れるなんてな、めんどろくさがりが適当に考えたいんちきだ。おまえの母さんは仕事帰りにできあいのものを買ってくるだけだからわからんだろうが、うちは梅干しだって昆布だって自家製だぞ。文句を言うな」

60 「聞いたただけだよ」

「腹が減ってればなんだったってうまいもんだ、それより水筒を忘れるな」おじさんはかれに弁当の入ったリュックを持たせた。

「弁当といっしょに乗れ」

65 急いで反対側にまわって乗りこむと、おばさんが外まで見送りに出てきて、いつてらっしゃいと小さく手をふった。靴底がアツいせいか足がすっかり地面についてふんばりがきく。柿の木道の道に車をもどし、山に入っていく。家とそのまわりではあんなに吸っていた煙草を、おじさんは口にしなくなっていた。

「山では昼飯のあと一服するだけだ。だいに吸って、だいにのみ消す。火事がいちばんこわい」

「でも、雨が降って木はしめってるよ」少年が言うとおじさんは感心したようにちらりと助手席を見た。

「そうだな。天気つづきでからつとしてるときよりは、心配がない。だが心配することと用心することは、似てるようぢがう。心配するのは、用心しない者が口にする言い訳だ。煙草はもう一日分吸ってきた。あとはおまけ、ごほうびだ」

70 「うん」

「なにが、うん、だ？」

「うんって、返事しただけ」

「そうか」

「(五)でも、いいにおいだよ、おじさんの煙草」

75 それからしばらく、だまったままゆれに身をまかせた。おじさんはわき水が流れている小川の横にあつた空き地にトラックをとめた。弁当と水筒の入ったリュックを少年に背負わせて、じぶんは細ながい麻袋をかついで先に歩きます。袋のなかには、

大小のシャベル、ツルハシ、そしてのごぎりなど、山登りとは関係のない道具が一式入っていてかなり重そうだったが、手を貸すわけにもいかなかった。

*

80 夏休みに入つてすぐ、どうしてもお父さんと話し合わなければならぬことがあるからと、母親は少年を兄夫婦にあずけた。ここに着いた日は平日だったので、むかえに来てくれたあとおじさんはすぐまた仕事に出て、翌日に母親だけ帰っていったから、一対一で向きあうのは今日がはじめてだった。東京では、親しみをこめて「トンネルのおじさん」なんて呼んでいるけれど、父親が家にもどつてこなくなつてから一年以上になるし、学校の先生以外に大人の男のひとと話をする機会もなかったから、言葉を出すタイミングがうまくつかめない。働きに出るようになって、母親は少しずつ変わつていった。いそがしいからなんて言い訳をぜったいしないひとだったのに、息子のほうを向くようになつて、母は少しく変わった。十日くらい、もしかしたらもつとながくトンネルのおじさんのところで世話になるからね。母親がそう言い出したときも、だからおどろきはしなかったし、落胆もしなかった。それで家の問題が片づくならなんでもしようと思つていた。そして、思つていたからあえて口にはしなかった。日記と計算ドリル、漢字ドリルはわすれずに持つてきた。遊びにあきたら畑の仕事でも手伝えばいい気分転換になるなんて母さんは適当なこと言つていたけれど、夏の工作だけはまだなにをつくるかすら考えていなくて、それを食事のときふともらしたら、食卓でもくわえ煙草のおじさんが、じゃあ、木でなにかこしらえてみる、材料ならいくらでもある、と少年を見た。

90 「木っ端や枝を使う工作は、もう友だちがやつてる」
「じゃあ、根っこを使えばいい」
「根っこつて……」

95 「そこにある」
食堂から見える居間のテレビの横に、いぼいぼのあるたこみたいな木の根が、蛍光灯の光を照り返しながらつややかに鎮座していた。あめ色の木肌がくねくねして、外国の物語で知つたグロテスクという言葉を連想させる。顔に出たのだろう、おじさんがめずらしく笑顔になつて、そうこわがることはないと言つた。

100 「おなじものをつくるわけじゃない。それだつてもとはたのまれ仕事だ。こういうかざりものの好きな連中がたくさんいるんだ。根を掘りだして、いろんなかたちに見立てる。その気になればたこに見えたり、ひとの顔に見えたりする。節も、傷も、みんなちがう。それを生かして、よい部分を生かす。水で洗つて、皮をはいで、木肌を出したらワックスをかけてみがく。それだけだ」

「おもしろい？」

105 「どうだろうねえ」とおばさんが代わりに応えた。「くぎを打つたりしないから、工作にはならないかもしれないけど、でも、せっかく田舎に来たんだし、田舎のおじさんの言うこと聞いてみたら？」

「田舎のおじさんとはなにごとだ」

「だって、いまどき木の根っこを掘つてみがくなんて、どんなに想像力のある子どもでも考えつかないわよ」

おじさんは不機嫌そうにビールをあおり、その気があるなら日曜日に連れて行つてやる、小さいのを掘り出せば、あとはひとりでぜんぶできると言つた。

*

110 地面はあいかわらず砂利と赤いむき出しの土で、見るからにすべりそうだったが、おじさんのあとをわざと追わずに道のわきの下草をふんでみると、むしろそちらのほうが危ないようだった。都会育ちの少年の言葉にぬかるみという単語はないに等しい。公園のこみちはどこへ行つても舗装されているし、学校の運動場はかろうじて土になつてはいるけれど、水を吸つた状態で遊ぶとグラウンドをいためるとの理由で、雨の日は使用禁止になる。ねちやねちやと音のする土にふれる機会は、まずなかった。山道にはしめつた草木のかおりが満ちていて、すっぱいようなくさいような、あまり気持ちよくない種類のものもあつたのだが、そういう複雑なおいのする道をはねたりジグザグに進んだりしながらのぼつていくのは、車に乗つてるときの数倍も楽しいと少年は思った。おばさんが用意してくれた日本手ぬぐいの切れはしのおかげで、靴のぐあいもいい。ずっとまえからはきなれていて靴みだいに足になじんできていた。

115 (六)「だいじようぶか」おじさんは少年が寄り道をして足音がややはなれると、すぐにふり返つてたずねる。声をかけなくとも、五分に一度はふり向いて姿を確認する。

「だいじようぶ」

「いま休むとかえつてつかれる。このまま行くぞ。リュック、重くないか」

「うん」

「重かつたら、持つてやる」

125 とときき聞こえていたわき水の音は、もうほとんどどかなかった。道はゆるやかに右にまわり、山肌を勾配なく横切るようにのびていた。二十分ほどだまつて歩きつづけたところ、おじさんが、お、と声をあげ、横道に大またでがさがさ分け入つて、ひとつの切り株に近づいていった。

「もつと先まで行くつもりだったが、こいつでよさそうだ」

かついでいた袋からスコップを出して、おじさんは根本の土を先でつついた。地表は雨のおかげかやわらかさうだ。一部の土

130 を取り除いて出てきたもつと固い土を、今度はツルハシの先で試掘する。何度かつきさしているうち、大きな石にあたつてがちんと音のすることがあったが、あとは土ばかりのようだ。(七)よし、やつてみると軍手をわたされて、少年は砂場で遊ぶスコップが大型になつたようなシャベルをにぎり、反対側を掘りはじめた。しかし、見た目からは想像もできないほど深く地中にいくこんでいて、子どもの力ではなかなか歯がたたない。アカメガシだ、こぶにいいいぼがある、そういうのをほしがる物好きがいてな、とつぶやいて、ああそうだった、こいつはもちろんおまえののだ、と言いなおした。こんなにたよりなげな木なのに、根だけは中型犬までなら簡単に包めそうなくらいがっしりと張っている。たとえ最後まで掘り出せなくても、日記に書いておくだけでじゅうぶんさまになるだろう。少年は感嘆しながら手を動かしつづけた。

「潮干狩りみたい」

思わず口に出すと、おじさんは顔をあげて、そうだな、と片ほだけで言った。

「去年、海の家に行つて、潮干狩りした」

「母さんで行つたのか」

「うん。ふたりで行つた」

「そうか……海と山で、ぜいたくなやつだな」

140 根に巻きこまれた石をツルハシでくぐり、かけらをひとつずつ拾いあげていくと、ゴボウみたいなひげのある細い根がだんだんあらわになり、土と根のあいだに空隙ができて手が入るようになってきた。ごつごつした根の中心が見えかくれる。ふたりとも、なにもしゃべらずひたすら掘りつづけた。さすがにトンネルのおじさんだ。これだけ軽快で力強い穴掘りのわざを見せられると、どこかでほんとうにトンネルを掘っていたんじゃないかと思えてくる。木をいためないようじょじょに掘る手の力を弱めていく。ぐらぐらして、あとひと息のめどがたつたところで、そろそろ昼にしようとおじさんはい、穴からはなれた木の下斜面にビニールシートをしいて弁当をひろげた。軍手をしていたのに細かい砂が入って、指先まで真っ黒になっている。それをしほりできれいにふき取った。

145 おにぎりはひとつひとつが大きくて、重くて、丸々している。ぴたりと巻きつけられたのりに米つぶの水分がしみてしつとりしているのも、色紙の細工みたいなパリパリしたのりのおにぎりばかり食べている身にはめずらしい。(八)ひとくちほおぼると、指先にも、歯にも、かけらがはりつく。おじさんの前歯にも、黒いしみがいつぱいできた。米つぶだつてふぞろいだけど、こんなにおいしいおにぎりは食べたことがない、ツナなんてぜんぜん必要なかった、と少年はすなおに感動した。おかずもぜんぶ手でつまみ食いし、お茶をたくさん飲んで、しばらくは動けないくらい胃を満たした。おばさんが心配してくれていた靴ずれはでさなかつたけれど、さすがにつかれたせいか、足裏がむくんだように熱を持っていた。それを言う、と、靴をぬいで少し横になつ

150

てみる、元気が出てからまたはじめればいいと、おじさんは編みあげ靴から足を引っこぬく手助けをしてくれた。ぬいたとたん、林の冷気のなかで熱が引いていく。リュックをまくらにしてひろげたビニールシートのうえで横になると、木漏れ日に目がちかちかしてそのまま意識が遠のいていきそうだった。おじさんはポケットから煙草をとりだして火をつけ、ゆっくりとじつにうまそうに吸い、ふき消したマッチの軸をようじがわりにして歯のそうじをした。

「おまえの母さんと、このあたりに来たことがある」

155 おじさんがつぶやくように言った。(九)母さんという言葉に反応してぬむけが消え、少年は半身を起こした。

「ずつとむかしだ。若いころは農業なんて平べったい言葉はつかわずに野良仕事と言つてな、友だちのまえじゃその言い方が、どうにもかつこ悪い。だから田んぼや畑に入らないで、町へ働きに出てた。二十五か六のときだ。十六も年がはなれてるから、あいつはちようどおまえくらいだった。お盆に帰つてきたら、学校の工作の宿題がまだ終わつてないといつて泣いていた」

(十)はじめて聞く話だった。「ぼくとおんなじだ」

160 「そうだな。間伐材を拾いに来たんだ。海に流れ着く木があるだろう、あれをまねていろんな形のえだを探した。最後に、ひと顔に見えるものばかり選んで、ペンキで色をぬった」

165 おじさんは指が焼けるくらい短くなるまで吸った煙草をしめった土におしつけていねいにもみ消し、おもむろに立ちあがつて靴底でぐりぐりとふみつけた。それからシャベルで土を小さく掘り起こし、吸いながらうめた。念には念を入れてのことだろうけれど、家のまわりでのあの大きっぱな処理のしかたを知っている者には信じられないほどの慎重さだ。ひとつづつと背のびをして、今度は大きいほうのシャベルをつかみ、首の後ろに柄の部分まわすと、両うでをだらんと柄にかけ、そのまま右、左と身体をひねった。おじさんはまた軍手をはめて穴のへりにしゃがみこみ、細くてじょうぶな根を引きぬこうとする。少年はじゅうぶんに冷えた足をあわてて靴につっこみ、ひもをむすぶのもそこそこに、ぼくもやると言つて穴にもどつた。もつと太いものになると深めにシャベルを差し、支点に大きめの石をあてがつてこの原理で持ちあげるのだが、このくらいだとすぐ傷がついてしまう。安全をdキすならやはり手で持ちあげるのがよさそうだった。ぶちぶちと根をひきちぎりながら、おじさんが、母さんはいつむかえに来る？ と少年にたずねた。

170 「十日くらいしたら。電話するつて」

175 「ほかになにか聞いているか？」

「聞いてないよ」

「そうか」おじさんは、ほんの息つぎのような間を置いた。

「楽しいか」

180

「うん」

ひげの生えた根がどんどん両手に集まって、まりものような玉になる。なぜだかわからないけれど、ずっと開けていないたんの引き出しのなかみみたいな、かびくさい空気がふつと鼻をつく。ぶちぶち言う音が消えたところで、おじさんはようやく手を休めた。

185

「(十二)休みが終わるまで、いてもいいんだぞ」

麻袋からロープを出すと、おじさんは穴に片足をつつこんで二また、三またにのびた根の周囲に二重、三重にわたし、両はしをのばしてそれを少年ににぎらせ、飛ぶように地面にあげた。それから少年の横に立って、せーので引つ張るぞ、と腰を落とした。真つ黒な土のうえに、形がまったくおなじでサイズだけが異なる靴が四つならんでいる。(十二)この靴、だれのなんだろう？ 根ではなくその靴を見ながら少年は問いをのみこみ、おじさんのかけ声で一気に引くと、めりめり音を立てながらロープがのび切ってぴんと張り、みにくいかたまりがわずかに持ちあがった瞬^{しゆんかん}間いちばん細いところがばきんと折れて、ふたりのおしりをしめつた土にやわらかくたたきつけた。

190

(堀江敏幸「トンネルのおじさん」より)

〈語注〉

- ※1 編みあげ靴：足首の上までひもを通してはく、深めの靴
- ※2 鎮座：どっかりと場所をとっていること
- ※3 グロテスク：不気味なさま
- ※4 語彙：ここでは、ある人が使用する語の全部のこと
- ※5 アカメガシ：植物の名前
- ※6 間伐材：木の生育を助けるために、一部の木を切り取ったもの

〔設問〕

解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。

一 〓線 a 「アツ」(7行目)、b 「キザ」(16行目)、c 「ソ」(20行目)、d 「キ」(174行目)のカタカナを、漢字で書きなさい。

二 「少年」が「おじさん」の家に来ていることについて、全文をよく読んで以下の問いに答えなさい。

(1) 「少年」はどのような事情があつて「おじさん」の家に来たのですか。説明しなさい。

(2) 「少年」は「おじさん」の家に行くことをどう思っていましたか。説明しなさい。

三 〓線(三)「どうやら思わず知らず笑みをうかべていたらしい」(48行目)とありますが、「少年」が「笑みをうかべ」たのはなぜですか。説明しなさい。

四 〓線(二)「おじさんは煙草の煙といっしょに、ふぬつ、と変な音をもらした」(12行目)、〓線(四)「それまでめんどくさげに……おじさんの表情が、心なしかやわらいだ」(48、49行目)とありますが、この二つの表現の説明としてふさわしいものを、次のア、エの中から、一つ選んで記号で答えなさい。

ア 最初は靴が重くてよろめいた少年にあきれてしまったが、思ったよりも靴になじんでいる様子を見て、安心している。

イ 最初は田舎風の靴に対して不満をもらす少年が不快だったが、やがて靴を気に入った様子を見て、機嫌を直している。

ウ 最初は靴を持ってバランスをくずした少年を心配したが、意外にうまくはきこなしている様子を見て、感心している。

エ 最初は靴をうまく持てない少年を見て笑ってしまったが、靴をはいて喜ぶ様子に、ますますほほえましく思っている。

五——線(二)「少年の言葉が……はつきりしなかった」(20、22行目)、——線(五)「でも、いいにおいだよ、おじさんの煙草」(74行目)とありますが、この二つの表現から、「おじさん」に対する「少年」のとらえ方が変化していることが読み取れます。どのような変化ですか。説明しなさい。

六——線(六)「『だいじょうぶか』……確認する」(118、119行目)について、以下の問いに答えなさい。

(1)「寄り道をして」とありますが、「少年」が「寄り道」をしているのはなぜですか。説明しなさい。

(2)このときの「おじさん」の気持ちは、どのようなものですか。説明しなさい。

七——線(七)「よし、やってみろ……掘りはじめた」(130、131行目)とありますが、「おじさん」と穴を掘ることとは「少年」にとつてどのような経験になっていますか。次のア、エの中から、ふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 山の不思議な姿にふれるうちに、おじさんといっしょにいる緊張感がしだいに消えていき、失われようとしている家族のきずなが必ず元にもどるという確信を持った。

イ 山の中には信じられないような自然の姿がかくされているのだとわかり、穴を掘るおじさんの力強さに感心しながら、それらを自分の目に強く焼きつけることができた。

ウ 山の中には想像をこえたものがひそんでいるのだとおどろき、おじさんの穴を掘る技術に引きつけられながら、二人で夢中になって作業するうちに、心がひとつになった。

エ 山の中には思ってもみなかったようなものがかくされていることに気づき、山をよく知るおじさんのたのもしさにふれることで、都会よりすばらしい田舎の姿を発見した。

八——線(八)「ひとくちほおばると……すなおに感動した」(150、152行目)について、以下の問いに答えなさい。

(1)「ひとくちほおばると、指先にも、齒にも、かけらがはりつく。おじさんの前齒にも、黒いしみがいっぱいできた」とありますが、この二人の様子からどのようなことが読み取れますか。説明しなさい。

(2)「ツナなんてぜんぜん必要なかった」とありますが、「少年」がこのように思ったのはなぜですか。説明しなさい。

九——線(九)「母さんという言葉に反応してねむけが消え、少年は半身を起こした」(160行目)、——線(十)「はじめて聞く話だった。『ぼくとおんなじだ』」(164行目)とありますが、「少年」の「母さん」に対する思いはどのようなものですか。次のア、エの中から、ふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 母は言い訳をしない強い人で、少年はさからうことができなかったが、母が子供のころ、宿題ができなくて泣いた話を聞き、それならば今の自分とあまり変わらないと思って、安心してゐる。

イ 母がいそがしくなり、さびしさを感じていたが、母の子供のころの話を聞いて自分の知らなかった姿を知るとともに、自分も同じような経験をしていることに、母子のつながりを感じている。

ウ 母と別れてくらしているのですびしかったが、山の生活になれ、おじさんともなかなくなってきたところで、母の子供のころの話を聞き、母がこいしくなつて、今すぐ会いたいと思つてゐる。

エ 母と二人で都会でくらしているとき、おたがいにいそがしくてゆつくり話すひまがなかったが、子供のころの母と同じ経験をすることで、母の本当の姿を理解できるようになり、喜んでゐる。

十——線(十一)「休みが終わるまで、いてもいいんだぞ」(185行目)とありますが、「おじさん」がこのように言つたのはなぜですか。次のア、エの中から、ふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 都会の生活でひよわに育つた少年が山で遊ぶことに夢中になつてゐるのを見て、せめて夏休みのあいだだけでも少年をあずかり、たくましくきたえてやろうと思つたから。

イ 山で遊ぶことの楽しさを少年がわかってくれたことをうれしく感じつつも、やがて少年が帰ってしまうことを残念に思い、もっと自分のところにおいてほしいと思つたから。

ウ 母親がいつむかえに来るかばかりきりしない少年をかわいそうに思う一方で、少年が山での体験を楽しんでいることに安心し、できるだけ世話をしてやりたいと思つたから。

エ 二人で立派な根を掘りだすことができたことがうれしく、少年も楽しそうにしているので、夏休みが終わるまで時間をかけて作業していい作品に仕上げようと思つたから。

十一 「少年」と「おじさん」の関係は、どのように変化していますか。作品全体を読んで説明しなさい。

十二 — 線(十二)「この靴、だれのなんだろう？」(188～189行目)とありますが、君はどのように考えますか。
~~~~線A「おじさんの靴と……ひと目でわかった」(24～25行目)、~~~~線B「視線を移したおじさんのま  
ゆが……とたずねた」(34～35行目)に注目して、君の考えを書きなさい。

〈問題はここで終わります〉

〈以下余白〉

